

「青少年教育指導者専門研修」

平成 26 年 1 月 21 日（火）～24 日（金） 3 泊 4 日



I 事業の背景（必要性）

国立青少年教育施設の役割の一つとして、青少年教育指導者を対象とした専門性の高い研修の機会の提供が挙げられる。

国立中央青少年交流の家は、我が国最初の国立青年の家として創設された歴史的な背景や、首都圏からも比較的近く、交通アクセスなどに恵まれていることから、多くの若者や青少年指導者の研修などに利用されてきた。また、富士山の麓にあるというフィールドや多様な研修が行える施設設備なども有している。

こうしたことを踏まえ、本所では、教育事業の柱に専門性を高める実践的な「指導者研修」を重点に掲げて取り組んでいる。

本年度も、今日の青少年教育が抱える現代的な課題を取り上げるとともに、最前線で活躍する指導者にとって役立つ実践的なものを心がけ、青少年教育活動に携わる指導者などの資質の向上が、より図られるような研修を目指した。

II 事業の概要

1. 趣 旨

青少年教育施設や教育行政、地域等において、青少年の健全育成に携わる指導者に求められる、専門的な知識・技能を習得し、指導者としての資質・能力の向上を図る。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

青少年の健全育成に携わる者 30 名

（青少年教育施設・教育委員会・教育研修所・NPO 法人団体・民間自然学校・自立支援機関等・青少年厚生施設等で勤務及び活動する者）

(2) 参加状況

<内訳>

	男性	女性	合計
青少年教育施設	16	4	20
その他	4	0	4
合 計	20	4	24

<参加地域>

	男性	女性	合計
東北・関東	9	2	11
中部・近畿	7	1	8
中国・四国	2	0	2
九州・沖縄	2	1	3

(3) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成（交流の家作成）
- ② 全国青少年教育施設への配布
- ③ 全国都道府県青少年教育担当部局への配布

- ④ 全国政令指定都市青少年教育担当課への配布
- ⑤ 神奈川県・山梨県・静岡県の近隣市町村青少年教育担当課への配布
- ⑥ 青少年教育に関するNPO団体等に配布
- ⑦ 新聞社へ広報文の掲載を依頼
- ⑧ 自然体験活動推進協議会のメールマガジンへの掲載依頼

3. 日 程

21日 (火)	13:30	13:45	15:00	15:15	16:45	18:30	20:30
		開講式	①実習 「学びの場づくり」		②講義 「青少年教育の“いま”と “これから”を考える」		情報交換会
22日 (水)	9:00						19:30
	③講義・実習 「青少年教育施設におけるグループワークの理論と実践」						
23日 (木)	9:00					17:30	20:00
	④事例研究・演習「ケーススタディで高める企画力・運営力」 事例1「地域でつくる通学合宿～静岡県内の取組み～」 事例2「多彩な主催キャンプ～企画・広報・運営に着目して～」					「まとめ」 －企画力・運営力 の要点－	
24日 (金)	9:00	10:30	11:30				
	⑤講演 「教わる教育・伝わる教育」		まとめの時間 閉講式	(解散)			

4. 内 容 (活動の様子)

(1) 「学びの場づくり」(実習)

講師：国立中央青少年交流の家 職員

- ① 研修をはじめると同時に、お互いのことを知ることをねらったアクティビティを行い、参加者の緊張を和らげ、能動的な参加を促した。
- ② 参加者の研修に対する期待を共有し、ともに学ぶ仲間意識の醸成を試みた。

(2) 「青少年教育の“いま”と“これから”を考える」(講義)

講師：国立中央青少年交流の家所長 服部英二



- ① 青少年教育施設には、予め設定しておく意図的なプログラムによって成るフォーマルな教育の側面と集団宿泊生活によって得られるインフォーマルな教育の側面があり、両者の調和と統合が重要である。
- ② 青少年教育を取り巻く現状は、社会の急激な変化によって成長発達に必要な体験が不足しているなど課題が多い。しかし、その一方で法律や制度としての体験活動の位置づけもなされ始めている。

(3) 「青少年教育施設におけるグループワークの理論と実践」(講義・実習)

講師: 玉川大学学術研究所「心の教育実践センター」助教 村井 伸二氏

- ① 「みなさんが思い描く“グループ”とはどんなイメージでしょう？」この問いかけからこの時間は始まった。2日目の今現在、どのぐらい参加者がお互いのことを知っているのかを確認した上で、アイスブレイクを行った。相手のことを知らない、表面的な関係で終わってしまうことを理解するだけではなく、“なぜ”そのアクティビティを取り入れるのかという指導者側の意図の重要性にも意識を向けた。



- ② 活動の後半では、グループで課題を解決するアクティビティを行った。ある場面では、参加者同士で意見の相違が出始めるなど、グループの雰囲気停滞することもある。グループワークにおいて、時に衝突する場面に立ち会うことがあるが、グループ成長の段階において有効的に作用することを体験を通して学んだ。

(4) 「ケーススタディで高める企画力・運営力」(事例研究・演習)

ミーティングファシリテーター: (公財) キープ協会環境教育事業部課長 鳥屋尾 健氏

事例1 「地域でつくる通学合宿～静岡県内の取組み～」

発表者: 御殿場市教育委員会社会教育指導員 湯山 伸彦氏

前栢ノ木区地域づくり活動主事 田中 豊氏

足柄小学校通学合宿実行委員会 斉藤 広人氏

事例2 「多彩な主催キャンプ～企画・広報・運営に着目して～」

発表者: (公財) 日本 YMCA 同盟国際青少年センター東山荘副所長 佐久間 真人氏

<事例1の概要>

- ① 静岡県「地域における通学合宿推進事業」は子どもの異年齢交流機会、直接体験や社会参加体験の減少と地域社会の帰属意識の希薄化、連帯感の低下という現状を改善するべく、静岡県教育委員会と静岡県地域教育力再生プラン運営協議会が主管して実施している。



- ② 県からの補助金は、①2泊3日以上で実施②3つ以上の異学年の小学生が参加③宿泊場所から1回以上の登下校の条件を満たす事業に対して交付される。新規で短期合宿(2泊以上5泊以下)の場合、上限13万円の補助である。その他の経費は、参加費や企業からの寄付金で賄っている。
- ③ 事業の主催団体は、子ども会、おやじの会、婦人会、PTA、ボーイスカウト等を中心に組織された実行委員会であるが、当日は多くのボランティアによって運営されている。
- ④ 宿泊場所は、地域のコミュニティーセンターにレンタル寝具を利用して宿泊している。食事は、参加者が調理する場合とスタッフが提供する場合がある。また入浴は、近隣の温泉施設を利用している。生活に関わるプログラムが中心となるが、それ以外にはキャンプファイアー、ドミノ倒し、軽スポーツ等を行った。
- ⑤ 数年継続して実施することによって、地域の団体が応援してくれるだけでなく、個

人の協力も増えてきている。

<事例2の概要>

- ① 主催プログラムは、子どもを対象にした「こどもキャンプ」と誰でも参加できる「主催キャンプ」がある。両者を合わせて年に10回程度開催している。
- ② リピーターも多く、大変人気のあるプログラムではあるが、非常に手間隙をかけて準備をしているので、これ以上数を増やすことは難しい。
- ③ スタッフが率先して楽しむことを大切にしている。その姿を見て、子どもたちが引き込まれていくことが多々ある。思いっきり活動するために、実際に行うプログラムは、下見や実体験を何度も重ね安全性を確かめている。
- ④ 現在は、1名のスタッフが企画から運営まで担っている。その方を中心に今まで人気プログラムに育て上げてきたが、後継者やスタッフの育成が目下の課題である。
- ⑤ 主催プログラムの他に宿泊者向けの様々な受託プログラムがある。グループの種類や規模を問わず、富士山と東山荘をフィールドとして独自の自然体験プログラムを提供している。



(5) 「教わる教育・伝わる教育」(講演)

講師：一燈園・燈影学園 校長 相 大二郎氏

日本で一番小さな私立学校で、「奉仕勤労体験教育」として“祈り”“汗”“学習”を柱に据えた独特の教育を実践している。人間性や生活習慣は口や言葉で教わるものでなく、日常生活の中で“伝わる”“自ら気づく”ものであることなどが述べられた。



5. 評価

(1) 評価の方法(アンケート調査の実施)

講義の内容及び運営面について、満足度に関する4段階のアンケートを実施した。

(2) 結果

- ・参加者24名のうち、23名から事業全体に「満足した」との回答を得た。
- ・各講座の満足度は概ね9割を超える回答を得た。

内 容		満足度
事業全体(運営面含)		92.8 %
①実習	「学びの場づくり」	100 %
②講義	「青少年教育の“いま”と“これから”を考える」	87.5 %
③講義・実習	「青少年教育施設におけるグループワークの理論と実践」	95.8 %
④事例研究・演習	「ケーススタディで学ぶ企画力・運営力」	95.8 %
⑤講演	「教わる教育・伝わる教育」	91.7 %

(3) 自由記述による感想

- ① 歴史や背景を知ることにより、青少年教育の必要性を改めて理解するとともに、今、そして未来の課題が見えてきました。
- ② 今まで長い間行ってきたアイスブレイクやグループワークについて見直すことができ、目からウロコが落ちる思いで、とても楽しく参加することができました。
- ③ 当初の目的を自分なりに達成できたように思いました。研修を受け身ではなく、受講者同士が協力し合って研修できたことで、満足感、成就感を味わうことができました。
- ④ 自分の知らない技術や足りなかった考え方等を3泊4日通して学べた気がします。また他の参加者の方と交流を深めることができました。
- ⑤ このような青少年教育に携わる指導者の研修の機会は少ないので、今後も継続して欲しいです。また、色々な施設を見学できるという観点からも、他施設での持ち回り開催も検討して欲しいです。

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- ① 事業を企画するにあたり、過年度の同事業のアンケートを参考にしてグループワークの実習時間を多くする配分する等、ニーズに則した内容となるように設定した。
- ② 知識として理解したことを実践できることが重要であると考え、講義と実習を組み合わせるとともに、研修の時間を十分に確保した。
- ③ 「企画力」「運営力」を高めるための研修の手法として、「事例研究(ケーススタディ)」を用いて、成功事例の協議を通じて、その成功要因を追究することにより企画・運営のノウハウを習得することとした。
- ④ 「企画力」については、企画と運営を一体的なものとして捉え、事業プログラムだけの企画だけではなく、企画から運営までの全プロセスを企画することを想定した。
- ⑤ 青少年の指導方法として、精神的な内面を育てる手法としてのグループワークに焦点化し、理論的な背景を理解した上で、今後の活動で実践できる力を身につける内容とした。
- ⑥ 指導者として長く経験を積んだ者にとって、自身の中にできている「青少年教育の枠組み」について再考する機会とした。

2. 運営のポイント

- ① 参加者が主体的に研修に参加できるように事前アンケートを行い、講義に期待することや自身が課題としていることを確認した。そして、集約したものを参加者に配付し問題意識の共有を図った。
- ② 予め講師に参加者の事前アンケート結果を伝えておき、講義内容の中に参加者のニーズを取り入れていただくことにした。
- ③ 事例発表の資料は、事前に参加者に郵送し、予め質問等を考えておくことができるように配慮した。
- ④ 最終日に、ワークシートを用いて4日間の研修のまとめを行い、受講者が個人でふりかえる時間を確保した。また、ワークシートは受講者の了解を得たうえでコピーをとり、今後の企画運営の参考資料とした。

3. 成果

- ① 青少年教育に携わる者として、技術面のスキルアップだけではなく、様々な専門的分野の理論をあらためて学び理解することで、今後、青少年を指導するリーダーとして、また青少年活動の実践や業務に活かすことができる指導者としての資質・能力の向上につながる研修となった。
- ② 長く経験を積んだ指導者にとっても、初めて体験する研修方法や新たな切り口からの講義によって、自身の中に出来上がっていた「枠組み」を再考する機会となった。
- ③ 全国各地、16 都道府県から参加者が集まることができたため、それぞれの施設・各地域における取り組みを紹介し、意見交換し合い、参考になる点や改善できる点等を互いに確認することができ、プログラムの内容以外の部分でも充実した研修となった。

4. 今後の課題

- ① 主催者が各講義などのねらいや関連性を解説し、各々の研修内容を橋渡しする等のナビゲート技術を更に向上させることが必要である。
- ② アンケート結果では、概ね満足度が高かったが記述欄を分析すると、評価が大きく二分しているところも見受けられた。これらは今回の受講者の指導歴や経験にバラつきがあったことも一因として考えられる。多様な人々が集まるメリットとデメリットを精査し、募集対象の絞込みも検討する余地がある。
- ③ 事例研究は、参考となる事例を題材とすることが必須であることから、情報のアンテナを高く・広く張り、魅力ある事例をリサーチ、キャッチすることが必要である。また、依頼する講師を探すうえでも同様のことが言える。

担当：望月奏 柴田勝好